

平成 27 年度 第 1 回 山科区民まちづくり会議グループ別討議まとめ

【Ⅰ 環境を守り継ぐ】

1 各基本政策ごとの評価の確認

(1) 評価の結果について

- 昨年に引き続き高評価であり、良い傾向である。
- 公園については、トイレの不足などの問題も多いが、清掃活動は行政ができないところを住民が担ってくれており、管理は良好である。
- 河川環境は、不法投棄や、ごみの量が減ってきており、ホタルや魚、水鳥が戻ってきている。河川パトロールも昔ほどの人数もいらなくなっている。
- タバコの吸い殻が減っていたり、不法投棄も減っている。
- 山科では全体として、環境のマナーが良くなっているのではないかな。
- 環境学習は、「充実」とまではなかなかいかないが、地道に「継続」できている。
- 地球温暖化対策について、京都で開催された COP3 の時の様な盛り上がりはなくなっている。

(2) 評価の方法について

- 委員は山科区在住でない人もおり、山科の実態を知らないので評価しにくい。山科区の人が担当するような仕組みができればいいのだが。

2 次年度以降に重点的に取り組む項目について（予算要求へのアイデア出し）

(1) 次年度以降に重点的に取り組む項目について

- 環境に関する取組は継続が一番大切である。以前の状態に戻るのには早いので、充実よりも今の取組を継続していくことが必要である。
- 活動の実施主体である区内の企業数の減少や、地域団体の高齢化の問題もあり、取組の継続方法について、工夫していく必要がある。
- 具体的な取組としては、天ぷら油の回収について、家庭にも負担がかからないように、家庭に回収に出向く、ペットボトル容器を使う、などの改善を行ってはどうか。
- 家庭用の天ぷら油の消費そのものが減っている。増えているのは事業用である。ただし動物油が混ざっていて今のままでは回収できないので、動物油も回収できる研究や事業化が必要である。

【Ⅱ まちの魅力・観光を磨く】

1 各基本政策ごとの評価の確認

(1) 評価の結果について

- 施策全体の評価の点数は上がっているが、昨年に比べ、評価の点数が下がっている取組数が他の施策より多いことから、まだまだ課題が多いのではないかと。

(2) 評価の方法について

- 評価にあたって、客観的な指標が必要である。
- 指標として考えられるのは、観光の分野であれば、山科区を訪れた観光客数、区内における宿泊者数、寺社仏閣などの観光名所に訪れた人の数など。スポーツの分野であれば、区内のスポーツ人口など。ただ、農業分野など、指標が出しにくい分野もある。
- 委員だけではなく、地域の生の声を拾っていく方法にしていくべき。

2 次年度以降に重点的に取り組む項目について（予算要求へのアイデア出し）

(1) 次年度以降に重点的に取り組む項目について

<観光について>

- 観光分野の指標について、京都市全体のものはあるが、山科区だけを抽出したものが無いので、事業・施策の効果をj知るため、区内に限定した指標を集め、公表すべきである。
- 市内中心部に比べ、山科区は発信力が弱く、その結果として、市の予算が山科区の観光振興事業に充当されない。
- トイレ、駐車場、宿泊場所など、観光関連のハード設備が不足している。特にトイレは、不足していると感じられる。
- 山科駅は区内で有数のターミナル駅であるにも関わらず、観光案内所がない。常時観光関連のチラシを置くことができるような場所が山科駅にあれば。
- 区内の事業者等のやる気を引き出すため、成功例を作る、生み出すことが必要である。
- おこしやす“やましな”協議会は活動を行っているが、その他に、山科区の観光施策について、区民の多くの立場から議論し、知恵を出す場がない。脚光を浴びている疏水通船事業を活かすためにも、恒常的に議論できるそのような場を作ってはどうか。
- 観光の施策について、主に、企画立案をするのは区役所ではなく京都市であるので、区の事情を京都市に伝え、京都市全体の観光施策の中に、山科区の観光振興を位置づけていく必要がある。
- 山科まつりを、神社の神輿を集結する形で、活性化する必要がある。
- 山科にしかないものや、伏見稲荷大社のように、季節限定ではなく、いつも見れる、入れるものなど、観光資源の発掘が必要である。
- 他の分野にも共通することであるが、担い手不足という課題がある。
- 観光客のニーズを把握し、施策に反映させる必要がある。

<農業について>

- 引き続き、区内の野菜について、発信力不足という課題がある。
- 山科なす等は、生産量が少ないが、その希少価値を活かした取組を検討したかどうか。

【Ⅲ 交通・都市基盤を強化する】

1 各基本政策ごとの評価の確認

(1) 評価の結果について

- 一番評価の点数が低い施策であるが、長いスパンで見ないと成果が見えにくい分野である。
- 道路の分野においては、新たな道路が完成したなど、具体的な成果ではなく、取組の努力がどのように行われているかの評価になる。ただ、努力の評価については、基準を設けるのが難しく、目にしたことのある取組であれば評価が高くなる。

(2) 評価の方法について

- 50の評価項目は多い。
- 中には、評価に専門性が必要な項目もある。
- 文章のみでは、評価がしづらい。

2 次年度以降に重点的に取り組む項目について（予算要求へのアイデア出し）

(1) 次年度以降に重点的に取り組む項目について

- 消防車が入れないくらい狭い旧道があり、整備が必要である。
- 幹線道路はまだまだ混雑しており、西京区の千代原口のような地下トンネルがあればよい。
- 警察と区役所などが連携し、自転車マナーの向上や、自転車の取り締まり強化に取り組んではどうか。
- 違法駐車の手で、自転車が走りにくいという声もあり違法駐車の手締りも必要である。
- 阪神高速稲荷山トンネルについて、区民が日常的に利用すると考えると料金が高いため、通行料金を無料化する、京都ナンバーの車だけ料金を下げるなど、料金体系を見直す必要があるのではないか。

【Ⅳ－① 保健・福祉・子育て支援を充実させる】

1 各基本政策ごとの評価の確認

(1) 評価の結果について

- 評価の点数は上がっているが、高齢者の孤独死や子どもの貧困対策など、現実の相談件数（深刻事案）は増加するなど、具体事例に対応できておらず、評価の点数と現実とのギャップがあるように感じる。
- 実感としてよくなったと思えない。
- 実感がわからないということは、変化なし＝評価なしと同じである。
- リアルな実感と評価点数の間を埋める作業が必要となってくるのではないか。
- ユニバーサルデザインについて、評価しにくいのは「目に見える成果」が少ないため。山科区は生活空間なので、区民が最も利用する場所を特に重点的にユニバーサルデザイン化しない限り、区民の「変化した（よくなった）」という実感がわきにくいのではないか。例、駅などは特に重点的に改善してもよいかもしれない。ユニバーサルな視点に立って、「〇〇（公共の場所など）を改善します」という目標を立てた上で、改善に取り組まないと、見える成果としては残らないと思う。
- 学校教育に関しては充実しているが、それ以外（学齢期以外）の年齢から、高齢者や福祉の分野がまだ充実していないと感じる。

(2) 評価の方法について

- 点数のみで判断するのは危険であり、成果や結果について、区民のリアルな声を汲み取る必要がある。
- 学区ごとや、児童館ごとで傾向が違ってくるので、小さい単位ごとでも評価結果を分析する必要がある。
- 項目が多いので、もう少し評価する項目を絞ったり、専門家の評価チームを作りそこで評価してはどうか。
- 空白の評価についてもその是非について議論が必要で、空白が多い項目の文言の変更等が必要ではないか。
- 空白の評価欄を作るくらいなら、しっかりと評価できる専門家に評価してもらった方がよい。
- 誰が評価しても適正に評価できるような指標を作るべき。
- 施策の計画当初から現実社会の実態が変わってきており、50の取組の文言の修正をするべきでは。
- そもそも、課題を把握していないと評価もできない。
- 取り組んだ事業について「実施しました」報告のみではなく、〇〇の課題について、どの程度取組、成果として、どのような成果が出たか。残された課題は何かといったことを明確化し、評価する方が、具体的な数値が出やすいと思う。

2 次年度以降に重点的に取り組む項目について（予算要求へのアイデア出し）

(1) 次年度以降に重点的に取り組む項目について

- 区内には、公共施設の数が少なく、利用できる公共施設でも、料金や利用条件や対象者に制約が大きい。ワンストップ利用できる公共施設のリデザインが必要である。
- 学齢期以外から高齢者までを対象とした支援が、不足しがち。その範疇の対象者が寄り合える場が少ない。寄り合えるとしてもカテゴリーが明確化すぎて、障がいを持つ人は障がい者支援場へ、就労支援が必要な人はその支援場へと、分けられすぎて、対象を狭めすぎず全範囲を網羅できる公共空間がない。

- 公営団地に住む世帯には、独居老人やひとり親世帯など困難を抱える世帯が多く、外部に出てサービスを受けるのは難しい。訪問サービスや団地内に支援サービスを行う事業所を設けるなど、団地の中にいながらサービスを受けられる仕組みを作る必要がある。山科団地、西野山団地などで試験的に取り組んでみてはどうか。
- 山科の居場所の情報などに関して、困っている人に確実に届くような情報発信が必要である。
- 情報発信について、専門家の手を借りて、情報発信をこまめにすべき。
- 本当に困っている人に情報を届ける手段としては、「人づてで知ること」が多い。そのため、情報の発信者と「情報を届ける人（例：ケースワーカーなど）を別に養成する必要がある。

【Ⅳ－② 保健・福祉・子育て支援を充実させる】

1 各基本政策ごとの評価の確認

(1) 評価の結果について

- これほど多くの取組が山科区内で行われていることを知らなかった。こういった機会があつて、感謝している。
- 実際多くの取組がなされているが、普段の実感とのかい離がある。
- 市の施策については、どう評価をすればよいのか難しい。
- 園庭であれば安心して子どもをあそばせることができるが、園外だと難しい。公園の整備は、基本施策4以外の項目であるが、公園の整備という事項であっても、多様な視点から評価をする必要があるのではないか。

(2) 評価の方法について

- 区内で行われている取組が全国的に進んでいるのか遅れているのかわからない。全国的な施策との比較も必要ではないか。
- 専門的な立場や普段からその分野に接している人からの専門的・実感的な評価と、普段その分野に接していない人からの客観的な評価の2つの視点からの評価が必要ではないか。

2 次年度以降に重点的に取り組む項目について（予算要求へのアイデア出し）

(1) 次年度以降に重点的に取り組む項目について

- 疏水の通船事業が実施されているが、疏水近辺は景観もよく、道やトイレなどの整備が進めば子どもたちも安心して外出できる。子どもたちの安心・安全の確保という視点で事業を進めることで、すべての人が暮らしやすいまちになるのではないか。
- 一昔前のように、地域ぐるみで子どもを育てることが難しくなっている。今しようとするれば新しい枠組みや仕組みが必要となる。しかし、地域の中には能力のある担い手がたくさんいる。そういった人を引き出す仕組みがあってもよい。
- もっとみんなが助けてほしいことや困っていることをオープンにして、地域で埋もれている人材とマッチングさせるといった仕組みがあってもいいかもしれない。

【V - ① 地域のつながりを強める】

1 各基本政策ごとの評価の確認

(1) 評価の結果について

- 全体として評価の点数は上がっているが、実態は上がっているか疑問である。
- 町内会未加入の区民がどんどん増えており、地域のつながりが強まったとは思えない。
- 地域の担い手である委員が評価しているので、評価が上がるのは当然なのかもしれない。

(2) 評価の方法について

- 委員だけで評価するのではなく、アトランダムに区民を抽出して評価をしてもらってはどうか。

2 次年度以降に重点的に取り組む項目について（予算要求へのアイデア出し）

(1) 次年度以降に重点的に取り組む項目について

- 公が全てをするのではなく、地域のことや自分たちのことは自らが行うという住民の意識を高めるため、行政サービスを減らすなど、住民自らが努力する方法を考えるべき。
- 清水焼団地では組合員が高齢化し、女性会でも若い人がなかなか入ってくれず担い手の問題がある。ヨガ教室や健康教室を取り入れるなど、若い人をなんとか巻き込んでいく仕掛けを考える必要がある。
- GOGOカフェなどを活用し、若い人を巻き込む仕掛けを考える人の養成を行うべき。

【Ⅴ - ② 地域のつながりを強める】

1 各基本政策ごとの評価の確認

(1) 評価の結果について

- 町内会未加入の区民がどんどん増えており、地域のつながりが強まったとは思えない。

(2) 評価の方法について

- NPO法人やボランティア団体が、地域のことを分らない状態で評価をしても話にならない。
- このような場を通じて地域のことを知る機会とすることは大事だ。
- 議論の時間が足りず、消化不良である、しっかりと時間を取って議論をしっかりと行うべきではないか。

2 次年度以降に重点的に取り組む項目について（予算要求へのアイデア出し）

(1) 次年度以降に重点的に取り組む項目について

- 若いうちから、地域に関わることを大事である。
- 町内会の未加入問題については、いっそのこと義務化をしてもいいかもしれないが、仮に義務化するにしても、十分動けていない自治連合会もあるのだから、まずは、その底上げ支援策が必要である。